言葉の玉緒　七

ホ 2
5407
7

詞瓊綸七之巻

古風の部

萬葉集によりて。古風の哥をよむともがら。仮字づかひをバくはしく
わきまへ知れども。てにをはのとゝのへハたえてうかゞはざるゆゑに哥もとゝのはぬ類も。と
とのへざることのみおほかるハ。かなづかひを定むるのみとおもへれバ。み
づからおちかへりて。こゝろえられもするとハなくして。うたがはるゝこともおほ
かるべし。それよりほかにまどはしきことのいとたやすきをてにをはしみな
定まれるそのひの首て。さまざまにさかる時をおとしめれど。其のはじめに
さきしまへさとるところやたがひぞあるにまかせて後の世にハ大かたこゝの集
のさまにならひて。つかひゆゑせる人も猶あらじ。しかしこれバあ

錦華堂
門 本 2 號 5407 冊 7
昭和36年5月9日 平野金之助氏寄贈
36.609

やまとことおもきぞかし。古に書る詞にまれ。此てにをはのそのとゝのふるは。たとへ
ぞ深くあきらかにして強からん哀れおもしろきことばをいふにあへて後撰
ありたぬつる古今乃ゆるしかたんはえぐらしかるじやも。新しき古風をまなぶと
もがら。このきはその人の心思ひ見ぬは。いかにいぶりにてにをはも定まら
はなきことくやむなむ。さもなくば此そのひはさらに後の学に定めたる格にはなら
ぞ。神代の始より人の言語にまじはりておのづから定まれる格にしたがはれ
だ。あやまりたんせざるまじくしれのづからよくその格をだにいはゞ人はおのと
も此ことなしに学ぶともなりしを後の学びて。やゝしくおもだいかく。こゝや
むかしは格ならずあるまじにあらず。かゝるふようて。とかくさうざらるおもく
をちがまりし此までに今はなきさらにしづかなると見ざれど。ゆきまりめえ

がくなん蔵よきる物を古をてにをはとらふなく。けれどもみかりしるすこうて。
書伺べきあたらしかうしむやはのかなづかひも古はおのづからわきまへる言葉の部
にかたて定め出つる格をぞ。今せるどもれのづからしたがふてはなかりし故ぞ。
諸ふそのこゞんはなかりし後よみぶましうるふようもて。其のこゞんは出来しに
あらばやいで上つ代よりてにをはを定まりの示しかなひたる事をみにしくい
ちむ。まづ古事記と日本紀とふの書る古き歌ききあはせて百八十餘首ある。
皆いと神さびて。今の学ぶ耳遠き詞らはあやしまれども。てにをはいたりてぞ。
古き事よりことなるへとめくり同じくて。おし移る事なし。そう中に。
ふく仁徳の御世皇后のはこゝにあることて二まゐよき。天皇の御のうた
御歌にあやしきは八ぬべもえきよきしとかる此二つある。あそとかるてきと結び

よる。後の格にまぎるゝ。但しこれも万葉集ハ例おほければ下に出せり上つ代の一つの

格ともいふべし。又推古。紀に聖徳太子の御歌に。おやなしになれなりけめやさすたけの

と。汝親なしにありけめやといふことなれば。後世の格ならば。なりけめやと

あるべきを。きをえやといへるハ異也。但し此格も万葉集ハ猶ふ多く。いへるべし。下に出せり 古へ

の格なるべし。後の歌にも例もあるも。雅言集二つやこ人紙てまつらしめや時なる今ぞ出べきを呼ていづれなる。源氏をとめの巻に月影のもしろくありけり

をえやをとめごがもの 頼なりきしかて 右の三首をおきてハやゞく定まれる格のでしうれていとく

うしろしきりてあるれバ上つ代よりしておのづから定まりいることゆへ時にしげ古風

をよまん人もいづかてふをはをしるさんでハ有べきそのことがらめくよろし

をけがせるするなく。ふうきをざる故にけをくるし古への歌をバ見るまじ。此をのひわる

くぬきもしぐるゝし。此よ万葉集も二十巻四千五百餘首の中にそ僅ずくなく見づらし

き調。又いひざなつでをさるなどハ。いたく異なることあれなれど。てふをはのそのひをり

ひよりてハいたく中昔の格とはじくて。たゞる今ハ百ふもよろつもえしらぞ然れバ此て

ふをそ然るのへのさへしるで古ちを集よりてまたのをちりて後のたがふておけ

きこゆ。今此部りし。古への歌のへとそハ別に何ともなし。古風をよまむ事とほど

く紐鏡三類の後なる治よく考へうく。いかくしめさるべき物也。

○万葉集の中にてふをはるあつる歌

十四ノ六七 たくぶすましらやま風のねなへどもころがおそきのいろしそえ しも。志

えしもハよしもとそ。さて上よりとかく二てそきしと結ぶ格ハ。集中に多きことぞこまハし。こ結

づるハながいりし。ハ志。ハ吉の俣也。ころうるめの色ハ。係るのその辞なればかくつゞきて

十九ノ四十四 天地とあひさかえんしと大宮を流へまつれバたふとくうれしき

とまハ上りぞのや何などのてにをはハなく

して。しきと結べる。あるなり

五ノ九三 たらし姫神のみことのなつらすとみたゝしせりしいしをたれ見[き]

こゝハ上にたれとあれバ。見しと結ぶべきを。見きといへるハ誤なり。されども。志を吉に誤れるなり。古本ハいとよく叶へり

十四ノ九九 妹をこそあひ見にこしかまよ引乃横山べろのしゝなすおもへる[へる]

こゝハ上にぞのや何などのてにをはもなけれバ。おもへりと結ぶべき格也。然るをへるといひてハよろしからず。るといふべききはみ。後世にも此例あり。二の巻変格の條に見えたる

十九ノ十六 志かしみ狩みがわしら見えぞなくなる山しされバいき[ろ]こととは

こゝハかゝりなしハいきよとゝもなしといふ格也。りしハ流の字ハ理などのあやまりにハあらずや

十ノ四十三 秋田かるかりほをつくり我をれバころもで寒く露おきに[ける]

此結句の例を他の歌に考るにいづれも露ぞおきにけるとかきたれバ。こゝもなにぞとしを脱せるなるべし。ぞといへでけるとハ結びがたし

二十ノ六十八 かくしつゝもみふよりつきなくうらをおきてぞき[ぬ]やおもはにして

こゝハ上にぞとあれバ。きぬるといふべきを。きぬやといへるハそのころのなまりのことばにや。又やはやもといふべきを。ぬとのみいへるかたくるし

二十ノ九四 あしがきのくまどに立てわぎもこが袖もしほゝになきしぞもは[ゆ]

此結句ハ泣しぞ思はゆといへるにて。上にぞとあれバ。ゆると結ぶべきを。ゆと結びたるハ。東ぶりなればそのゆゑ

四ノ九九 いきてあらバ見まくもしらず何しかも死なんよ妹といめに見え[つる]

こゝハぞのや何などもなくして。つると結べり。かなれど上の何しかもハ。此結びへハかゝらねバ也。但し此句をいきてあらバと訓ときハ二の句結をうけて。何しかものもへつるをかくる也

九ノ八 風莫のはまのしら波いたづらにこゝによせ[くる]見る人なしに

こゝも上にぞのや何なけれども。くると結ぶべきを。くるとあるハ誤なるべし。一云知加久二依来藻とあるハ。よるをうけて。万葉のころの格をみるべし。よろしきハよもを誤てかくべきをくるも例なり

十四ノ六 ひさしねのをみなえがらしわかれゆくおやがなかげにいもを孫しな[くる]

結句こゝとはじき日去廿一の歌に今一首あり。あを孫しなくるとハ我を孫ふるにて。その歌のかたをさだめて。くとなれるも。御ふ此歌ハ上にぞのや何のてにをはなきにハ。かゝるといひてハよろしかれ。かくしそれハ変格の例也。されど此哥ハ

きみまえぞ、ごしまろ妹がおよびてこを称しまくなと言ふ事也。次に。或本
なりとてのせたり。故に下の歌は係る辞なればよろし。又旧本の如ふ
あきを称しまくよ。又此の本に十三のひらかれあきを称しまくとなども。いつどもろも
よ。又此の本に係る辞なればよろし。皆故に係る事まで見しるも。さて此ら
如くとらひて。下にあるよとなどのみ辞を係るを
以ても知るとらふかよろしからぬてあるべきなり

十八ノ十九 ほととぎすいと待ちまくハたちなるは花ちる時ふきあれちよ むら

こきも上よぞのやらのてふをもあるれべ
ひろと法づるよろしかるを

十ノ二十 見づらしれ見渡えんとぞ思ぶらまの月うる方はまのあかき つき

こきハ上ゟしぞといひてつきと法べり。り。しハ禮ハ類字などの得ハ
ならずなり。六帖に八二の句を。見えんとこそと並して入うり

十八ノ四十四 長う 白川世みの岩は人来とこてきゑとぞやそしるしとゆきくる

身はをおらふ天の原ふりさけ見つてひつぎふ もれ

あきハ上ゟしてそといひなどして。まきと歩しるいへど。但し上ふ
まとといふ辞ならぬ此辞あそに毎ふ例あり。五の巻にの部ふ出せり

十七ノ四十七 なかなかに絶えのりしおといひちらへあがふいのちをたゞ生ため ふなき

此読句ハいふいてろみうちなとのことも没がなし。上よ至るがといひてなきと法べるなく
いかで。りしハ新遠ハ海に泛ぶと思へど。さるもなかじ。従よく考ふべきなりし

二十ノ四十五 ほととぎす波まがなく鳴あいかふせば家門もだれ下 かへらり法ぐまで

こきハ上ゟしいふとゆきばそざらんといそでハる八なまさハいひがききまくそ。
鳴ぎじといてらいどし。こおしにあらひて。なをそをみづらふもべきふあしだ

二十ノ十五 かしこしやみこもかでありし月ゆり や うへがらひそのまをいむまじふして

此のハやめじれむまび
なし。つど

十テ十 うしぶきてかきふし袖をみまりはそうしとへやみぞきこん うと

あきを上よやといひて。又うとしむるで
うまもだ。意のとこそならべきき

六十 にの流のふかれつきうれでおもうとちりみだれてこの川どうと

かくいひてハ。うと二つまあり
しるらしのひがし

十二ノ 廿九 古今 葉をハちりてかへ【加介】るあそそらえてかへ【加尓】ここ

此加へるふ二つともに飼早とかきたれど早ハきハ先て誤字なるべし。かふと
いひてハてふをはそのまゝ。めしハ嘗字なり誤りて二つなるかひなきと訓べきなれ。
ともあれかくまゝ誤字なるを八雲ひなし。されど
むかしく今の本ハまゝに訓てこゝにハ出せり

上の件あハせて二十首ばかり中に字の誤れる例のあやまれる文字ハおほくく
なじみやとおぼしき所又変格の例などハまづさぬなどあきられ十首ばかりハ
省又もべくしるしたり。六首ハ本字にして能さバこまかきものぞきてまさしく大が
へりよく八九首なり。猶集中ハくりかへし見れバ今二三首などハかりもし
なんかもしく落葉をよくみそえ見出るる集中にも行しべきまでくに
あさぐひかるふきなかひてかき行つ先なる集なるもしく思ひなる録首の中に
そのをぬえまづふちかりなりそでハまじらぬをみてもおよりてふをそ

のらんひとたのづらし定まり者つるさとりつるべし。

○同集の中てふをは遠つるに似て遠つるにあらざる歌

二ノ十二 玉かづら花のみさきてならざるはたがこひにあらめ【め】我こひおもふを

三ノ四十一 かしぎらもかきあひざらめ【め】山乃はにいさよふ月をよそにみてしが

四ノ四十 何かなき老人なおもしがくしいふバ志忌やわがせこおくもいふかめ【め】

七ノ四十一 わがせこをいづちゆかめ【め】とさきたけのそがひにねしく今し悔しも

十三ノ六十一 古今 こぎわかりつくもかひかくらめ【め】を 但し此めハ妻字を書たれどもくハ倶字なるべしとおもはるゝ

十四ノ十六 みちのくのあだたらまゆみはじきおきてせらしめきなバつらはかめ【め】かも（反 強 著）

同 十五 あづの浦を船なぐよしもなにこぐらめ【らめ】かもよなじこざるらめ【らめ】（何）

十六ノ三十 古今 あふせんあふとをこそらめ【らめ】。やらくらくとをぬめきてらめ【らめ】やふえ

ふきとく花を〔らめ〕や琴ひきとわするる〔らめ〕や云々

一ノ十七 長歌 いかなりしおもひし〔きめ〕かも云々

三ノ五十四 長歌 いかさまに思ひ〔きめ〕かも云々

四ノ六十七 いかなるおもひ〔きめ〕かも春さへ乃まくらかさなりいねぬ夜こし

件の歌どもらん。きんといふべきところを。めらめきをといへるだ。

ふ似たるごとし。集中にかくおほく例たり。又上ノし出せる。

本紀の歌などに見えし。後の歌にもこれ例あり。

四ノ四十八 うはさみけをみるはちかいちふかき手ぬまつ〔か〕思ふたぐさき

二十ノ五十九 うしと見しく恋をも〔か〕宿の梅は散をぶるまで見しめぬるか

七ノ四十二 みづきの妹を〔かも〕なし引乃きよに山べりまけバちりぬる

十ノ五十七 秋の夜は月〔かも〕恋しき雲がくるまでしもえてなバおこにひしき

こまつの〔か〕かも八皆切まて下へまかかるふ係加の格の結び辞とて

とぢしるる八遠るに似たる也。集中ふ此格あれ所見えしより

四ノ五十九 いひんぞてきなかく所りぬ此ころを〔いかに〕好まやいふかし

八ノ三十 ふる時と時あかりしの岩はたとしぎもあとつぎやかし〔いかに〕つげきや。

十六ノ九 長歌 〔たが〕子ぞ〔〕とやおもひていふらん云々

十八ノ五十四 長歌 〔なに〕しかも秋すしあらねバおもひのしのしたころ〔〕云々

しかれバいふ六がなふなどいふる。下にやかどいはと也。いふ八二つ見とふ切るる。

ぞうて切るうり下へ八かくつらぞ。何しうもハこうつて切るうりぞといふ

二ノ三 世に云ふ長歌 いきはをさりそれを思へど人見おわき〔こそ〕咲ぬふいふバ恋むく逢べき

ものを

十七ノ五十二 長歌 笑さへありへありてあき〔こそ〕よし恋やし云々

これらハこそまて切るとる所ふ。

下のこふをえにうてつらぞ

十ノ十八 きのふ見てけふ〔こそ〕いひぞ日ごもこがれてとくつぎて見まくふきも

十二ノ十七 をちもだくかく こそ ありける かきまろが事するつのまうとなふことはかたし

四ノ廿一 長哥 るに こそ ふりぬしかくれの ゑし
古しわてこそハ。親のぬかそてこそ結ぶ格なり。如で下
わるゆゑし。下のてふをはふかくりべし

十一ノ廿一 らくらなとおきつふうきてあやる藤のゆらしいま こそ 見ハよるへきき

同 廿六 かつゝまに見 こそ まなふるるひまあ白浪のよるおくれもなき

十二ノ四十 あくしろまたぬる妹をゆしぞ こそ 来なちきこともゆかるべき

十七ノ四十 長哥 野をひろみ 葉 こそ 志げきらし

十二ノ三十七 めなむ人あしびくくるのもしたまでおのが妻 こそ とこめづらしき
ことおもハこそとかくてきと結べり。此例日本紀にも二首ありて。上ニ出ぎる
也。右の二首の格也。右もまよりこゆく只此格なし

一ノ十一 長哥 いにしへもしかなりあれ こそ うつせみも妻をあらそふらしき

六ノ四十七 長哥 うべし こそ 見る人ごとにかたりつぎしのびけらしき
うべにらしきと結ぶハつねの格也。又六の四十の歌。十八の三十八のひらなどふ。うべこそと
かくもてきらしもと。是を添ても結べり。結るにたゞらしきといへる例ハ推古紀の大
御歌に。うべしかも蘇我のこらを大君のつかはすらしきとあり

七ノ十三 もろこけだこきなへむとおもひがせなにあひよると こと よるとけやもる
不解
これハかとやとまうりしれども。そのおちとハ(?)しぎ。又ちちえの流字。一本大家ど
ありそのらにて解易きといふをあきバやハてふをもにあし(?)

十八ノ廿一 あぞ乃秋逢見しまくにふえバおもやもづらしみやさぐる人
此の句ハ面稀えづらしも。やま
てふをは己ハあしき

十一ノ廿三 長哥 あふ しかも 此間六句 よろしき君が終まをすまかふや久まをも
むきならふや 此間六句 ゆたかさそふまおもとをたえぬえし
あとハあふしかもそて如きより。まるあちの下に何の結びなし。あふやのゆへりけてえべ
かりし。又下のまでこともそえぬのぬへもかゝらず

十九ノ六八 千二百 ［なにしかも］［四月十二日］こぞ見もえずと云々
これも同じく何しかもとうけて留まれり。下は、見ずのずへかけて見べけれど
○右二首の何しかもは、留まれる辞なれば、切るゝ所がおほし。けして、さて下にこと格の結び
辞ありて、やとらひ。又ずといへるなどよくせずばまぎれぬべし。今の世の人。ともすれば
んふおもひは、古の歌あしく心得て、てふまへをみだりにたててありれ。おのれもそれ。まま
ふ古今二る六十首を、うちいづるもてふをはるがことなし。例をいくらもつきても。切ま
ぎる所なり。上のてふをも、ちりて、切れぬまくるて、そのまゝまれ結び辞をおくこと

二ノ四十 千二百 ［いつ］さなへに思ひまさり云々
三ノ五十四 千二百 ［いつ］さくらに思ひまさかど云々
これらも上の何しかもと同じことにて。加ともて留まれり。さるまゝ下に、いつさなへの
結びあともなし

○千二百なき一つの格の例

二ノ二十 たまづさふ入日さし［ぬる］云々　三ノ五十四 夕やことからまし［ける］云々
三ノ五十八 冬かのあそ［ぬる］云々　み／又 いちあびきこやし［ぬる］云々

五ノ四十 玉きはるいのちをしさに［ぬる］云々　月九 しのびかねてしかり［つる］云々
十七ノ六十七 いかでかくしやは［つる］まゝ　十九ノ六十七 あさみどりのころもしに［たる］云々
二ノ六十 大空をみだれてきる［る］云々　十七ノ四十六 かつら木て志ぶる法ぐ［る］云々
十八ノ二十 こがらしのうちもとしへ［る］云々　六十七 かしてものうしぬべ［る］云々
十九ノ十三 からりつぎかたへ［る］云々

件の歌ども。上をしてをとからぬして。まとといひて切れたり。又
五ノ六十一 まきさかひふつるはされまかりいま［せ］云々　三ノ六十七 ……いま［せ］云々
右古紀上 八千矛神 よなひとかりかよは［せ］云々
とよてうも上にそゆるして。せといひて切る。上のまとを同じ格也。此まとせは皆古今
のまゝだにたて、本は他へ移る際に、いふ一つの格にて。下へぞを加へてまをせぞと

こゝ是ハよく聞ゆるに。右の外にある二の説もあるなり。されど哥のみならずさきの上を一云ともいふ
なるこそちよろしきなれど。さればよく見るべし。されど此歌短歌にしてハ一首なり。

三ノ 五十七 森さしらいはきを見むもあらぬみかげのかぎりを つゝみ たちしひとなし

こゝにありけるを つゝみ とよみて。きゝのむかしを加へて見ばよくきこゆる

㊀ 円来てにをはの訓を誤れる例

集中にてにをはをその字の儘に書きて、よめる例なし。或ハ上をよみ或ハ下をよみ。
或ハ上下ともに略きて書けり。又無しとよめるハ、なくしてなき、なしとよめる。有とよめるハ、ありとあり
とあるを来とよめるハ、くるとくる。なるとなりいづれもよまれたり。かくのごとくなるを見て後
としかれども今此を止めてよむべし。但し今此本をもて。の訓よハ誤れい
とかくなり。てにをはの訓ハ大かた誤りて多く附し。十六の巻五四の歌にもあり。
門の侶の小田をもむかしも

まゐりてもとの方に服此居の字。今の世の人ならバ必ざるらむと訓べきに。ありと訓るハ。其時
までもかゝる詞づかひ有しなり。此も上よりのやうの辞なれバ必ありとある格也。又十三乃巻
九の巻にもあり。そのれども吾者事上為あそびつゝ。日本十のはじめに出るをも
辞挙叙吾為許幹とし。此二の為字。一つハ上のかきたるを今もさなり
あなたるらと訓て。かくのごとく同じ為なる為字なれども。上のてにをはにしたがひてよまれ
りしなり。集中に字を略くとるなり。よくよく見てにをはなども。大かたハよみたし
して。誤れるハ その中にまじりくによみ誤れるを。今も此に出て論ず。
なくなし

十五ノ 五十八 うみぢ紫此 翁まんとやしやどりぬる夜をまつらん 人之 かなしと
此語句此之字の訓るハ誤るなるれバ下を誤りきとろ。かなしきとも訓べく
ありこゝハ誤りと結びられど。之字しこしよむべし

十六ノ 六十一 ぬむ我待 とじの大君 見るおもふに こせ乃ふる 之 たとしれぬかなと
此之字がと訓て。そこもなかりねど。猶しよむべきなり
一この外にも之字をよむべし。誤りでのと訓る方これなり。さなくて無べし

二ノ 六十七 なさぶるに 浮 ゆとてしきて 月日の 数多成塗 そこゆゑありしなと
この数多成塗をなまふるなりぬと訓て、なやまりあり。上よりのとなるばなくしハ結び
がらしなりと結ぶ格なり。このあたり塗字をぬとのとよまんともいふ。さる事ぞ此句を

まなくなりゆると訓べきなり。数多字まねくしく
よむべきならずなどあらしあるなり

七ノ四十 ふとちればおきゆきなげ 背[そがひ] みせよりへつるふ時ぞしくおきめのの

これハ上りてそみなれど。背字をそがひと訓るハひがことなり。
そむきとよむべし

九ノ四十二 ますらをおゆきのましみふらぬに 偃有[ふしたり]（コヤセル フシタル）

此偃有ハ上ののりをゆきのましみふといふへつらなれバ。ふしたりこやせるなど訓べし
上ののきこらに偃有といふ所へかゝらざれバ。ふしたることやせることと訓べし

十ノ十二 なりしきの大みや人もいとまあれや梅をかざしてあそびし 集有[つどへる]（ツドヘル）

これハ上りやとあれバ。つどへると訓るハかなハず。つどへると訓べし。
此歌のやりのなり。此の歌やの証もやの條にあり

十二ノ三 ゐしろなれいそのわらふらふおそしまねしれぞや嫁ありけん 難[かたき]（ガタシ）

此歌上りしぞのやりの辞なれど。難字がたきとハよむべからず。
がたしとよむべし。但し此の哥ただむずかしかれや

同四十二 きさもこ我妻ありしこともやまとぢのまもり雁なふるむけ 吾[わが]（ワガ）もとさ

十ノ六十 みやこへあそいゆし我ながときわがおもふ乃を乃 結手懈毛[ゆひてしものを]（ユフ テタユキモ）

此歌上りぞのやりの辞なれど。吾をあとよみてハ。あると訓がらし。ことを
吾字ひがと訓べし。がの結びなのと同様なれバ。おもふと訓ふるなり

四段なを。板本にむすびてしものと訓るハ。いかにもあらぬなり。又ゆひてしものと
も訓てこれハよろしかれ。上のながとふる辞の結びにかなハず。ながきとと訓べし。
此の歌五十一のひとあそんのいふをいうんをなふをとうぞのよしをてしの繁と此歌
も上にあるとなふあふさきをと訓て。そ此歌をことと同じ様なり

十九ノ四十 天地の神ハなりしやよろし記王が法乃 離流[さかる]（サカル）うと

あるハ上りしやと行となバ。あるべくとこそ結ぶべきを。あるみてハかなハぬなり。あるると
よむべし。奥よみぶけそととなる言も行となど。必さかるとてよろし

おちるなびのよみ給りぐもしくしるりバ様もあるなんとみなあらんぺて
さかるべし

○古風の辞

これハ万葉集ぬらちに。古き来よりこなふの家まハ見しね辞まく

ほどに辞もはるひざ春なくは古風なるかぎりを。大くくりしねき出
て。たゞひきくらち来先立せり。されども此辞どもし。すべてふを
そのかまはくのひふいふてハ。はのは定まりてふあとなりくるし。
むきつくべし。此辞どもをかしく見て。今よりまじらはてふきそを、
みだりにして。かやまるまじきなり。

□も

一 はるをはふつみ山のうぐひすてかすみたるみやことえさバかなし □ も
二 久かたはあそぶるおよくかふぎえしみこの浄門のかはまくをし □ も
六 ふるさとの梅をかハあまども春になりしたちは花香をみるとしよし □ も
七 まがせこをへづちゆらえとしたれのそびむ縁しく今しくやし □ も

八 秋くれていくらとかくるハ此縁なる野をの風をたまくちむし □ も
二十 そふるどはしやしきたのぐん大君乃名しゝみどりまた志めゆふべし □ も
三 たく山のゆきかまをげを招ふる見てむきちびしん日さなれ、ゆ縁つ □ も
四 りのくぬの八十うぢ川のかぐろ未ふいさよふ沿のゆくへ志らずと □ も
五 梅のたぐちくまくきしみ見るまはの籠やしにうぐひすをなく □ も
七 春がたと井はべゆきにさハかまとど君ふまさんとたのもほらく □ 本 も
十五 紀がくさらにでくらまばむこの浦の塩干はくこふかるゞ数さき □ 為 も
二十 白まぞこえこわき里までおうりけるたかなろをとするゆまのぐ □ も
四 かもらじともみもかもやいくはてみ河ちの中にあへまうまく □ も
十 おぞべえさばみでしこは寒暖りふるさとがまつ秋そちろづくりし □ も

○むのき七

五 天地乃もとに久しくいひつぎてけらしみよしのゝしかしも
二 あらしふくみむろの山のさ脇らうづきのもぞバつひにかゝりかてましも
十一 きのふえてもみぢそうひぞ こぞもこゝろたくつぎて見よくかきも
七 まきかもけふみるとのまた斎しそてや春よびそてへふちぞくも
四 うちんよハいり川もあらんを何もとうそのよひきてうめしげきも
十七 嵐ふしてゆひてしもろもちきみざ思ふあくろをたもうあんも
十五 秋の夜をあまくふらうらんあぞあぞいの狐しらえぬもむそろねまぐバう
三 まがおとうわぎきつるもうし
五 東路乃手児のよび坂あえがよて山よう狐んもやどりハ脇しに
六 みち絶えし〳〵ふる山の登べを清をしそわあぞしろけざれまらしも

右の哥どもいづれも上のてにをはハ。おの〳〵その定まりのくゝり結びて。その下へもを添へたるものにて。もハてにをはのかゝりハかゝらぬと知べし

○かも けも きも うべも いまぞも まことも いまさも
あたくも そやも あらまバも ゆやうに添るも いといとかけし

○もを二つ重ねて添る例 今もかも ふもかも あそもかも

○らも かしらも まぐしらも あましらも

○そも

四 さゞ名もも 子名のいれ名にたちぬとも忍ぶ名しくばあらしみしそあきを
日 子川乃流れしまる音もよし浅みを思ひて有しまごもも何ハきと
又 知るもも なげきひろしよるもも いきづき何しうし
十九 あまたにもも いまり川 深きも萬代まで志らきんといはつらゝあらふ

二十 うらめしく君こそあるらめ宮の梅の花をぐるまでこえしめじはまれる

又うぢ花のこそ

二 あさみどり月の浮世の萬世ありしあ花てさまし鳴のこゑやこそ

三 かくのしにまる物を萩の花けきてうりやらしきてこそ

十 秋萩乃花咲けきしかふかもいでぬまがゑるるあめりつまそこそ

雅光とにかりし。古るま集にもまそ。三の光その紛りし出せり

○こよ

かくまこよ 一ノ七　ふびしこよ 四　かちもけからハしこよ 廿七

ふるまびらしこよ 十六 十四ノ

古今集上光にもあるこよ　新葉集ちうこぬでゆぐこと又かきめこよ

などいへり

○とややこ 下のやの係より出　かこ 下のかの係より出　ぞこ 下のぞの係より出　ここ 下のこの係より出

○んのこのこ

四 なひ思はぬ人をやりとまたるへの種なげまでふ禄のこしなりこそ

こゝ是ハ注家ともきり。校本におくこと訓るハ。上のやの結びりがなハぞ誤也。おりもと訓べし。おかんのまちがひ

八 ・たか山乃菱の紫志ぬぎゆる雲のきぬとらいそこそあひの志ぎく

十二 人先あやもしやにあもむてきぶしらこそよぐこひなかバたがるみちはうこそ

これハ将有棠としるにうりて。はらんこと訓るハむがてこし。はらくこと訓ては將字はまもるゞやくなるたがくある例あり。まへしふを不知示とかるろぞひまり

十四 かくつまぬ佐田の苗のむしり苗そしきハ定きつ今ハいろふせこそ

二十 よそふのこえてやまこしこそなふそがしきのふえめ鳴おりおくふ

ぞ

十七 春花のうつろふまでにあひみねば月日よみつゝいもまつらん[ぞ]

十八 きりたちこよひそのまんにならぎずあきんあし鳴ならん[ぞ]

かくのごとくんぞとつゞけいへるは。古今集よりこなたはみえぬことぞ

○もぞ

六 きのふわがかりし衣[もぞ]こふべき　日まれ[もぞ]まかるべき

十二 あひおもはぬ人をおもふもかくしあらば[もぞ]こふるおもひをかくさず

もぞとはきいふを。古今集よりあまたみえず

○とぞ

二 玉藻[とぞ]なびけれどあかる川藻[とぞ]かれぞゆらぐ

四 よのなか[とぞ]なきならし

十一 立ておもひゐて[とぞ]おもふくれなゐのあかもすそひきいにしすがたを

これらのとぞは。古今集よりこなたのとぞのさまとは異にして。たゞぞとおのづからまがふるのみ

○ぞと

十 とゞまらし秋をきかぬたゞれぞと萩のもとに[ぞと]いまださきける

十二 逢見てはこひなぐさむと人はいへど見て後に[ぞと]おもひまさりける

十三 あまとを[ぞと]わすれによるとおもふ心[ぞと]なきにふるとふ

十五 人よりは妹[ぞと]あしきこひもなくあらましものを思はしめつゝ

このとぞは。ぞにとを添たるに。妹ぞもあしきとぞの格にて。此外にも何ぞもあやしとよめるもあり。三の巻ぞの部にも出せり

○かはぞ

十二 まそかゞみ今ちかき妹をなからしといづれもいも[ぞ]うけてこひける

五 長歌 いづくよりきたりしもの［ぞ］まなかひにもとなかゝりてやすいしなさぬ

十 よぐたちし秋をきかぬ妹と見れなふどいへ［ぞ］むもとらざらん

十三 年きはるまでふも人をいふなるいつのま［ぞ］もわがこひにける

同 長歌 いかなるや（一首ひのやみけれ）人の子ゆゑ［ぞ］かよはすもあごこゝろ

十四 柳こそきればはえすれ世の人の恋にしなんをいかにせよと［ぞ］

同 たれ［ぞ］この屋の戸おそぶるにふなみにわがせをやりていはふ此戸を

十七 ほとゝぎすなにのこゝろ［ぞ］たちばなのたまぬく月しきなきとよむる

十八 いかにせる布勢のうらしも［ぞ］こゝだくに君が見せんとわれをとゞむる

右の言共いづれも上よ何をといふ辞にて。ぞにて切てさるがごとくなれど。切るぞにはあらず。よりこゝのあたりへかゝりてよむべき事也。ぞといへるものも。さる故下のむすびも皆上の何をうけて。其結ぶ也。古今に雄略天皇の大御歌に。ゑ人ぞ大まへに。まをさばとうたひこしを日本紀には。ゑ人のまつ。このすがたまへによみて此ぞは。かゝる例也。

きこゆべし。又さいばら浅水のうたに。こと［ぞ］此中人ゐてみやこのかたちせうそこしぞおほひたらや。又万葉十に。吾がよされぞつまならん。こゝろも皆同じくて。かくかゝる也。

［の］

○とかゝふの

九 行きつち［の］とほく久しくひつぎとけらしみむおもしろしと

八 かくしぎ波きみきよもと知しる［の］ことをやうしてハましき物を

これらはの字とかゝふひてはゆ。寒く来るもまちかくの花もえぬべし白波のことも

又藤原ををきのことにしてかゝるぞの花をもひてうつろひみゆ

古今八にも此香のことに立出て

○一つ乃の

六 長歌 かつしかのまゝ［の］ちうらを嘆きん時しこそ

十三 長歌 さしまの乃よろしき山［の］いでたちのくはしき山ぞ

かやくにいつるの。わど長歌

あれはまく哉

○一つ乃の
四ノ六十三 みなせこそゆきのまふく　同六十七 大ぶねをこぎのまゝらふ
九ノ六十三 ますらをのゆきのまみに　同 父母がなしのまふく
又
十八 ゆしろはきぬてあく朝霜されでき[の]かなしもよ
二十 ふえをばえ[の]とりしく川えまぞえ[の]さやきしらし
○一つ乃の
三 いなといへどしひるしひ[の]がしひがたりこのころきかずてわれこひにけり
十八 しなざかるこしはきみ[の]とかくしこそ柳かづらきたぬしくあそばめ
十四 ひのくれりうすひの山をこゆる日八せな[の]が袖もさやにふらしつ

こゝろはのりぞ失すれぬひぢあまるをたすぐるが従ふとぞぞ。どこ本のまゝて右の三首同じ古点は一つの格なり

[や]

三 河風はさむき砂風をながさつしがたらしにありくもあ[へや]
十一 あづさゆみ末はしらずと恋しるがゆづるはぬんと思[へや]
十二 よしもこやいをまくしらすなくらみ継ふる川のたえんとおも[へや]
十五 妹が袖わかれてひさしく成りぬれど一日も妹を忘れておも[へや]
四 ら川く八りまがきのもとくしまくわりゆくんとい[へや]さを忘ふそそ
十六 うなゐらは桜やらし小麦はむるあとも八忘八よするをなれ恋ふる[きや]
十八 あぐさむるこゝろしぬくばかゝしかるむなふ一日もかるべしいは[きや]
十 かつしてそかひなるめのまきしぬくを毎月ふまは恋しけ[きや]と。

九 いづりはも人もあ【きや】と。ねき衣を朝にはやらなくびのたへしに

十九 あかろくふちかつはくしておりかへん その子な【きや】とこゑ
件のへやきやハ。ミなそのうへかゝる辞なり。おもへやハ。思ふらむ思ひハせじといふ
きぶけるきやハ。さするには志きハせじといふきまり。悔もこふなどもへあるべし。
下にとの係るも同じ 此格は古今集よりこなたにもまで。此のきのやの
例もし出せり

九 さしへりし夜をゆ【きや】かそころも霧もあらぬ山をしきむ人

四 赤らひき人にちる【せや】ゐらしあふがるきつけつと美しえゆる

四 志賀の浦乃よせつぎかんゆとおも【へや】いもが姿わしえゆる

十二 みどりごのためそしそおもハりとむといへ乳の【めや】君がおもしきむらん

云 湯の原りしなくつしろハわがおもし妹にらふ【きや】時ごかをなく

七 志かみてば へなる猿乃花な【きや】えろくちくなくちかくの都ぎき

七 せの山にたゞにむかへる妹の山ことゆるせ【せや】もうちはしわたす

十六 世中の人のなげきをおほのしぬ君にあ【きや】もとこやとせらるん
こきしハ皆やの上まぜを略る例そ。ゆきやハ。ゆきぞや。あらせやハ。あらせぞや。思へや
も思へぞや。ことやハ。ふきぞや也。係もみな同じ。下にとを係るも同じ。さて此格
へづもと下ハやの結びまでとぢあるゝ集中に此格のうち。きやを結よおきたるも。
古今集よりこなたのなきとなかし。此のきのやの例又出きるがなし

二 しが原のちへの一家となげきするんやもあ【きや】とうし

六 玉藻かる辛荷の嶋に島めする鵜にしと有【きや】家思ハざらん

七 いなくしは小埜ゆ秋津に立わたる雲にしとあ【きや】時をしまらん
あきつハあきと秘ふきみてや八係る歎息のやし。級ひよけらしべ。日本紀衣通
姫の御うたにあへやともしといふも同じ格也。又後の御うたと此格有
すべてうのきやせやてやへやめやきやはみなあぐし。今の本ハ訓を誤りて。
念哉とかるま。おもふやとよみ。有哉とかるをけりやあるやなどよめるたぐ

なかりし。よしてふ言葉の格を正して改むべし。をべらしかてなとぐひ。一
うぢの河乃瀬々を。一首妹ときも何やまることし。かろそうふをべりし。

○もや

七 行ふる妹海岸かしここと驚まりうし【もや】へちん去どよはなしに

九 たく里のて見し【もや】こひん来夜しあなびし山河忌りこえいなむ

こまつ～のもや。たまし～もとやとまなへるのしるそ。あとあるまみけれど。後の方にハ出なれぬ。又出せり。又古事記崇神段の方にみまきいりびこもや。倭建命の所何にあづまはや。同段の大刀もや。日本紀允恭巻に衣通人の詞によ弥めもや。みしもや。雄略巻の方に。はしたくこもや。ゆらしたくこもや。又仁賢巻の詞にあがつまもや。あどうるもやそ。語の終りに在て歎息の辞也。かの仁賢巻のある歌に。阿蛤矣とかけり。さて此もやハ万葉に。もえしぞ。後の方り一つ二つ有。その巻のやの語に出せり

○ともや

二 見きハ【ともや】やまみとえつりみな人乃えがてにもるふやもころとえるを

○やも

三 うなして衣【やも】いつし言し妹ふなし山さらしてきなみを

これハかりまかよあどの多くと同じくて。疑ひのやにかはらど。古事記崇神段のぬでゆしもや。又かきめりや。日本紀皇極巻を読に衣もまつ～次のやなど皆同じ

これもまた疑ひのやにもの係るのもなき

三 こゆりくの古川せをとめが手にまけし玉ハみなるとて行りとぞ【やも】

四 うつそみの【やも】悩しゆく方をとし妹にかみえしてあがむちろ孫ん

六 をのこ【やも】むなしかるべき萬代に語りつぐべく名はたてずして

一 秋もぢ乃おちて妹をゆらしば人妻ゆへ吾がちつひ【やも】

あさしもと同じとなり。やもの言葉

四 玉の緒をたゆまによりてむまべき者て後ふも何とぶら【やも】

二十　ぬれぬはたき去川をこえぬらむ君にかゝらんあとはきえ【やも】

十五　年にありて一夜妹にあふ彦星も家にまさりておもふらめ【やも】

七　まき柱はらる松人いはくもえりしか母のとめとはくりきえ【やも】

こまつりのさくひん。とらふべき所を。見とよむべきところを。今本にて誤りて。んと訓るなり。正し改むべし
此歌ハ。見といひて。やへはづけるハ。さはうへへ(?)の静(?)也。

○右の外にへやもまやもせやもなどいへる類を上に出せるに

○けらずや

二　はまとちはバつまてたゞぬし佐保は山里のうへのうまれるに【けらずや】

五　梅咲きたる苑の青柳はかづらにすべくなりに【けらずや】

六　泊瀬女乃はろる木綿花みよし野の瀧のみなわにさきに【けらずや】

八　此花の一よのうちはもゝくさの言もちかねてをらえ（所折）【けらずや】

此やハ。やもの(?)ぞ。けらずやも。まじとかふさまにおつる也。

【加】

一　あごのうらにふなのりすらんをとめらが玉裳のすそにしほみつらん【か】

九　衣手はあぎのほべをさむみしわたまちぬると家思ふらん【か】

一　しほさゐにいらごの島べこぐ船に妹のるらん【か】あらき嶋まを

八　夜ふけてはきるそでぞ久しきは夜うちはらひなん【か】

二十　青波ろし緒さへぬきてこぐ舟のかしふる程にさよふけなん【か】

かくのごとく。らんか。なんかなどいへる。古今集よりこなたはなるべし

○ぬか

廿　みさうしは夜もぬか【ぬか】いなづまに君にあひて此日くらさん

○あの巻七

四 佐保川のきしにあさ瀬ぬかるみの夜を常ならは行ぬら

七 やみの夜をくらしつるのよいつしかとまちまつ月もさやかてらぬら
此ふたひのぬらハ。ぬらんハ。ぬるハ。てらぬらハ。てらぬらんとかハりとい
ふ意にて。ひかりまさるをいふこともあり

○かも

二 石見野る高角山乃木のまゆも我袖ふる妹見つらんかも

十五 かつきてえんと思ひし めづらしき秋萩を花ぞかもみるかも

八 味香こしうへえて咲る梅花わがやとよりさへちるかも
これハ上のらんかもとらんかもをまけたるなり。
下へ廻りてのそれぞれ

○ぬかも

六 人言を繁み言痛み我が背子を見らくも少なき月の暮にあらぬかも

七 ぬばたまの夜わたる月をとゞめんに西乃山べに関もあらぬかも

八 長月の影の川原にひふるとおもふ心をきかぬかも
これハ上のぬかもと同じ。下へはのそハつる也。
こひしがふしきありあり

○ろかも

三 清み附りしたまひつるまひいや月まかなひつる嘆きればかなしき ろかも

五 神なからむまびいまにしみるたへにふふき ろかも
ろかもハ。古き紀歌記仁徳紀雄略紀。月本紀仁徳。万葉なとの歌にあり

○たのかに

見かも 同意のかの繁ふ

ことぬかも 下のてその條に出

○ぞに無ふか

四 あしひきの山のあらしはふくとしるにあり ら

小山田の苗代水井堰ことして

十二 むかしのあそんといひけるこそ有ありけれ[ろ]「あはぬ時さへおもかげにせまる為

此歌ハ三の句「こそありけれ」とよむべし。めし給ふ傍訓とせしハ「催馬楽」バふるくいふところなれど。かへぞに見えずはあらじ。其余りなく聞ゆるてよむときハ。聞ゆるぞといふべき見ゆ

○やふあふか

一 このせはいづくゆくらんおきつしまさかりは山をこふ[ろ]とゆらん

同 ながるるはまぬく風乃吹くによるせの音もさわぐ[ろ]ぬらん

同 よひにきてはしともなくなぎさに[ろ]をあきき蝶がいはりせしきかん

六 まなはあさの志やきでぬのなきぬる[ろ]一日を忘きまで思ゆらん

七 いかにしへさし有きん人もこがるる[ろ]みとは結にわびし折きかん

同 むらさきはあさぢの浦のまなごぢに袖のしるしをて涙ぞ[ろ]嵌かん

八 飛鳥川ゆききるなむ昇は秋さぎハ雪月にあらなし[ろ]るとかん

十 秋萩を見てはなぢをいつまでか[ろ]あきを守ててあきりなぬる

十五 大船をかしぬらたて深きよりきまさふの浦にやどり[ろ]せまし

三 いはふる人乃荷江のしらたまでたつる海士と[ろ]見らん猿ゆく流を

こゝろの加ぞ。後のなきバとるやといふところあり

一 しぶきはあしらの里残おきていなバ忘がいつかりいらんしぞ[ろ]を恋ん。

三 いかし流も思ひし川なき[ろ]とみかはなる二見のさゆきかれかぬつる

八 まちて気をなげきしつべき天の河べぞしまぞ[ろ]を待てさきべき

同 雲乾なきてはし鳥が玉ざし[ろ]を此里ぬ浅茅生守る。ける

こゝまでもやまぶかみ。其のそびらも。後のなれどやといふところを見とむ

[志]

○かひよせやを先師の説かど。万葉集子ハ詠ふきまゝにいらくつらひ
くるを。その中に後の世ふと同じ格なるハ既ニ五の巻の末乃條に出せれバ
こゝにハ引ず。今ハたゞ古今集よりあなたなるハ皆しるす格あるかぎりを出さるを

〽家 □ しぬだるも 一ノ六十六　〽かり □ なれし □ おもひゆ 同九

〽山 □ くれし □ たゆとかるらし □ きやをかるらし 三ノ六十六　〽ころもし □ きなし □ を 二ノ十

〽川 □ さやけし 同　〽雨ふし □ 何るらし 同六十一　〽こひなきまさるらし □ まさりてみるらし 同　〽山 □ 見がほし 同六十九

〽あきぐし □ なかる 同五十二　〽飛 □ さかまさん 四ノ六十六　〽桜川 山の方に □ 何るらし 同六十八

〽これ □ ハあらんを 同三十　〽美ふし □ 見るる 同六十一　〽もみぢ □ 霧立ハやせぬなきくふ 同五十九

〽 □ 紐さへぬきぬ 同四十九　〽もろかし □ 面影ふ見ゆる 同五十七　〽まつ □ にし □ 何らし 同

〽いをふ □ 見てん 同十一　〽琴ふし □ 有べし 同十二　〽忘れし □ まさん 同六十一

〽うへ □ 神代ゆさぐめきらしも 六ノ十　〽かよし □ とのし □ も 同六十一

〽ちらん時ふ □ おもてたむきん 同六十四　〽妹が袖 □ おのれるかも 同六十八　〽まちふ □ まさん 同四十二

〽あきれ □ まさる 同四十三　〽あくふ □ 見け里 七ノ十一　〽おもひ □ 出へぞ 同

〽たま人 □ 何まるらしも 同六十九　〽かなつなくまし □ 美に見しらしも 同四十二　〽今 □ ちりしも 同四十七

〽とづまを待ち □ まなく鳴らし 八ノ四十三　〽美ふ □ 見つ 同五十　〽見るらく □ しらしも 同五十八

〽今 □ ちるらん 十ノ九　〽今来 □ 待人も 十一ノ六十五　〽来ん □ 見ぬ 十二ノ十六

〽母 □ あらまでも 同十七　〽霜のこし □ なるら 十三ノ六十五　〽あるし □ いかし 同

〽浦 □ うつ見し 十六ノ七　〽浦まかく □ 見えん 十七ノ十九　〽あやし □ 見がる □ 十八ノ六十八

〽あひし □ あまてバ 同六十六　〽なぞ □ たつあし 十九ノ十五　〽猿 □ 志ぬだる 同十九

〽あひて □ ゆらん 同六十八　〽今 □ くらしも 二十ノ十三　〽若待人 □ おもひゆるかも 同五十五

闇夜しかるらし□ 月 巻十七
大くしのおもし。飛これをまたれかり
又二つありけらハ
今しもし□□ 巻の 巻十一 かくのこしこひし渡れバ 九ノ 六十六 命をしまくし□ なかるバ 十五ノ 卅三
十二の巻十二の歌した思ふかし□ なまりやしかぞえし。これハ下のしハ当麿のしと。助辞ぞなれば。
五十九の巻廿九の歌ハ国見しに せ□そくし□ ハ二つともに助辞にあらば。これハ左にあぐるを
見もとらひ歌を世まもらや。二つともにその意をよくわかして しくらるくき□をきくなる。
ゆくをゆるをなどいふを。又きかし たゆらしなるかたちかやはめし。然れハきゝつハらできく
といふ来日どきかでく。見しハこで見といふなり。来かた見ゆる見しあふなどいへ
るおもし。日本の巻十二の歌に豊明見為と作るも見し世まもと訓べし。

○よし□
あさによし□ 何さとよし□ 青葉よし□ 玉藻よし□ なし花よし□

○やし□
なしきやし□ よしゑやし□

○しも□
玉しもはてなむ何まどども 一ノ 十六 弓なへしもいつもあらんを□ 三ノ 五十六
飛しも何ら恋ん 七ノ 六十四 年ふしもはれまや 同 廿六 晴月しも見まんがおもとも 九ノ 廿五
あよしもちらしも生きてあらぬやも 十ノ 十二 久にをしともそしみ 同 廿五
あをしもまだそしともかも 十三ノ 五 人ハしもみちて何まどども忘れしもしも
おもくいませど 同 廿七 川そしも忘ねちきとはあらねども 同 三十
山をしもはてなる花みとと 十八ノ 六 あまをしも何やらふらく 同 十一

○しぞ□
緑のこしぞ想く 四ノ 十七 あく月しぞおもき 八ノ 廿四 ぬる衣しぞあはき 十ノ 三
此外にあしぞ思やといへる何らそハ在
来よりとあことあれる

○しこそ

かくしこそ　らべしこそ

な

一 よせ山乃はらく　つもれつもりて　おのが な こせ乃よせを

ロ 大ぶみ結れめひ於みし　あかしならば　森そこひん な うじに迄とゝ成

十 秋たぎのちりあひゆらは　さまさ落ちもびなきせん な こゝろみばらりしみ

十七 あらくぎ次あまちの投りゆきてゐむ　花ハちらん な みとゝこんろまで

十 梅笑替ともえしむぞ　ある雪みいちじろきん な ろ伎やらぞ

一云 ふる雪にまづちひやらぞ　ところどころん な

七 森にして　森さこゑん な いまく空結浅茅がうへにてならし月森を

○んの言結な

ゆきこしもやえな 早 四ノ五十六　あそびくしさな 五ノ十六　志那(死)なと思へど 同 廿八

いなかと思へど 同　尓ひてゆかな 六ノ十五 九ノ廿二 十ノ六十六 紫も同じ本ハ多し　言もこれもけな 八ノ廿二 十三ノ廿二

いざぬとな 同 五十六　森まハやらな 九ノ十　風まつりせな 同 廿一　めみぢたまくな 同 廿三

裳結まそぬとな 十ノ二　しゑてみざまとな 同 四十一　いでられそいかな 行 十四ノ廿

らりてなつまな 十九ノ十九　まそてかざしな 同 廿八　こもこれあきな 廿ノ十　見つ志ぬぐな 同 志

ざきを結みな 同 五十二　依らふつゝみおな 来 同　森をむきそバな 同 卒　袖にこきれな 同 六十二

いざむまびてな 一ノ十一　玉藻かりてな 十三ノ十六 六ノ廿二 七ノ十四　かざしにしてな 五ノ十五

ゆふむまむてな 十二ノ廿七　袖ハふりてな 十四ノ十　みなうつそへてな 十七ノ五十

恋しよつまな 十ノ十四

此歌古今集日本紀の歌よりとかり。いづれも皆んと同じこゝろにて歌はてんたくはかんじとさまいへる説大あきらかとも皆かなえたるにて知をんまくてたがふるかなし。但しんをそつうらのすゑにも又他のうへにもよりて此歌ハいくふり志らせんとこそるすにのこいひて他の人をたしかりうごかやうのすにいへる例なし。こまかにとかくひめし○十七の巻に例の歌なきつけい神ハ語りきと志らぬゑをゑぐたまへるなどこれハ他のうへよひて。此まハかんとこひ孫がふえまぐしより例なきことしかハ奈字ハ。尼ヶ年などの误みて。例まゝなきなりかくきる也。

ゑ

四　山のはにあぢむらさわぎゆくなれど我はさぶし ゑ 君にしあらねば

十一　たらちねの母にしらえず我がもてる心はよし ゑ 君がまにまに

十四　かみつけ野佐野のくゝたちをりはやし我はまたん ゑ ことしこずとも

此外よしゑやしよしゑやなどのゑも此同じゑ也。日本紀なりしゑしとかさねてもいへり

い

三　いなといへどかたれかたれとのらせこそしひ い はまうせしひがたりといふ

同　玉の緒のたえじ い 妹とむすびてしことははたさず　九巻にをとこ い はせあやまぎ

四　わがせこがあとふみもとめおひゆかば紀の関守 い とゞめてんかも

七　むら川をわたりてつかの木志づえちり花まつ い 京歎きつるかも

十　青柳の糸の細紗春風にみだれぬ い まにみせんこもがも

十二　たらちねのありなどさえてゆくあゆとあする妹 い いぶりしみせん

件のいは、こゝなる上の言に附て下にあり。日本紀の歌にもきのくにのこゝいは笛ふきのぼる　又宣命の例にもおほくみえたり考へみるべし。然るを此いをそうよびてくさぐさにいへる説あれどみなわろし

○たのかに言の頭に発語にかるいわしあれど今略きて出さず

くさぐさのやもじ辞

○ろ又らを助辞に添ふる多し。東歌又は特にろを多くおけり。又十六の巻

○玉のを七

○六大

み。ゑこのなりをハ思ひぞろうく。此ろなどハあふみえづらし

〇加を上りおくるなり　かやもし　かぐろし　かなを青

〇たを上における例　ささをたらかし　十七ノ二十　同二十三　たゆまゆり　十七ノ十八　同廿六　同四十四　十八ノ七

此たハ。なやもしたまされてなどいふたと一つなり。又田のさるてもあるべし。田をたむもとちうきて曲てゆくやうのさまなり。運字　指字などなるもしあるもこぎくミゆく。又みなよるそなどおほし見しより

ぞ゜を略く格

あまどや　なまどや　こふまどや　ゆきや　しまどや　のえや　もとまどや　おかまどや

ゆるせや　ちらせや　思へや

これらハ上のやの條なるも出せることばし　みなやの上まで ぞを加へてしれべし

おもへか　四ノ廿三　十五ノ十七　思へうも　四ノ十四　同廿　十一ノ廿三　なかきけわぐさもおきのゆふてたゆきも　十二ノ廿八

こふまうも　十三ノ九　家人のいまひまちねか　十五ノ廿三　あまうも　十七ノ四十七

家人のいまへぬうほろん　二十ノ廿八　これまかの上にもをへぞくぞを略ふまえづらし

ちまうハかの上りぞを加へてしれべし

あめがこふまぞ　四ノ五十　とふでくほまぞ　十八ノ廿八

これらハぞの上まぞを加へてしれべし

天地もよりてあまども　一ノ廿三　家みぞまるを　十三　のちせても　十二ノ　これまもの上にもとむハ謂りあり

かくらまども　四ノ廿七　おもへども　四ノ五十二　十三ノ十四　十七ノ十六　十八ノ廿八　こころなまども　十六ノ廿六

うひのまとそハ　十七ノ廿二　ちうまぞ　十八ノ廿八　ちる雪ろちへにつめてそまれ去るそる　十九ノ廿三

これらハそのよりぞを加へてことばなし

たのごとくぞを略く格をせてねへそまの下やかぞてその上に

かぎまつるてもし　いづれも後世之ハ耳なれぬやひがなある事。今のよりにハ訓を誤まるもあるたりし古によくてなまへてこころえべし

〇玉の緒七

〇六十七

らど。も。を略く格

風ぬらむかぜ 十四ノ九　まさかしよかぜ 同十三
こまつらかるぞといふべき所を。らを略きて。かぜといへり
どれきらども 十四ノ六五 十七ノ卅三　きしきど 五ノ十 十七ノ六三　なつちたなみをゆきよきど 十五ノ六一
どれきぞ 十七ノ六六
これらきもど きもとぞといふべき所を。もを略きて。きど きぞといへり

〇見らん　見らども
あとハ後世の格をもて見へば。見るらん見るらどもの字をちぶるがぬく。ゆめめれど。さまハいうれ。もべて万葉まハこま見らん。見るらん見るらどとのこいひて。見るらん見るらどもといふハ一つもなし。こまうくより志かいふべき格のこあれでこ。たのらもを略る格とハ同じ加れ。十は光士の部うに書地のうちだつくて。ふらしこもといつる。ふらし本同じ格まて後世なうバ光も見るらしといふべきを。見らん。ぞたを素は訓をもとうり

ぷ。ふ。ゆ。

称のくしなりゆ 五ノ卅八 十五ノ十三 卅四 六ノ五十四 六十二
なわし志ぬぞゆ 十九ノ十九
かくゆきぞ人をいとえかくゆまば人りふくまえ 五ノ十
見るふ志くえぬ 同二十　結乃てぶりをすくえふ児ま 同卅六
見さくえぬかも 十三ノ十　いの稀くえぬふ 十五ノ二十卅二

も。ふ。え。

おりえぬ人の衣りもくゆみ 七ノ卅三
見すくゆまじも 二十ノ五十五
志じしもなれを

あれよ於後世ふ。らる。らまなどいふ言。万葉に假字にある所ハ。いづれも些右乃ごとく。らゆ。らえなどしのこまて。らる。らまなどあるハいとくまきこちり記日本紀などの
あもここなる同じ於是ハ所泣所知所忘所偲などし書字にある所もここな假字に
の例のまふ於なりゆなくえ。志るゆ志るえ。見するゆ見するえ。忘ぬゆ志ぬえ。ご
と訓べし。今の本にこまうれゆえをふきと訓るハ古えまなうぞ。くなに正きべし

よ。ふ。加うを。

二　秋月てらさば於ゐべりなし毛のよみれゐりぬけらしぼろ［を］
七　ちりいを河志らゆふ里におちたぎろ流をさやはきと見よにし哉［を］
十二　行し川乃山よりいづる月まつしゝ人もハいづく妹まつらむ［を］
円　こがいのち於ちきくほしきくいつよる袂よしきる人をこふバかり［を］
二十　あらきふり麻鳴の神をいのりつもむらみるに哉ハさかし［を］
三　ちる月［を］かもが於山乃らく
十　本つ人わらくぎれ［を］［や］袂づらしく今やながむる言つくされぬ
十一　をとめら［を］袖ふる山乃みづがきの久しき時ゆ思ひきつ哉ハ
円　年へてさら手やいぬるいな［を］うと哉や志ら里ふ忘まちがて所
十五　いのち［を］しほらくしたらバありぎぬの育て後にも行くげらめやと

右の歌ハ生きをけるる辞にて。よくらきよ同じ。此の歌は土のさうに歌をくことをさく。これハ汝し吾をとらふてあるを。吾をくいふと同じく。汝へも知くいふらし。他乃よに何るをこくハかなわり文七の歌も土のこうらし十於書体の歌うみ無るさせをくよもへども云く。此歌ハもをなハちよがみ哉あるべし

十二　見れどもこれあかひをへな［か里］ひよ訓やき於戸おるをバ見る青かも

みよ無ふか里

十七　わが世とふこらひをだな［か里］あしがきのふりふなぎらふ何のましかかしも

こまらかべなるか里ハ。かべなえくいふに無ひて。生しりそて中ぎよりの辞にて。歌もがらくらふとも。がりホちらつるか里がなしがる。歌しがるなどのくらびえ。此がらがりを本一つるや。行しるおがるがりハ。かなうら後他のうへをいふ於の辞。ちくのありハみづらのうへしいびく。月他のたゞひる何ましこと。かようにて見る

ぞふ無ふふ

不知を云ふふといへるあらし。ちも中くもて。云きまどあらふきん十七へ云く
もあらふとも。日出あらふらか里

衣で

同 涙しぐれはいまもこ衣でにかゝるあけぐれのかなしさ

同 あまの川しいはゆふふかく衣でに月のごとくたりかゝりきく

八 ゆふ霜もいまだきえぬ衣でかわきぬる夜の月ふもえの秋えつ

同 卯の花をいまださかぬ衣でにほふをぎれ佐保の山べをききなきて

同 秋はちかくとしてくるも行く衣で此衣手の秋の夜ハたわれぬるしも

同 秋田かるかりや安いまだこずして衣でにくるかはにぬれしつゆおきぬがに

同 わが宿の秋萩の下葉を秋風もいまだぬか衣でにかくぞ見つる

十 一とせに七月秋の夜の行ふ人の夢もやま衣でよハふけゆくも

同 天川あまやさしき君が手をいまだまつ衣でにまかせのゆきぬる

同 秋たつのちひも濡き衣でにさむき風の夢はつれなくとぞまされ

同 行き山乃このそらもいまだかみぢ衣でにさふく雨ハぬれもおきぬべし

同 またむくの枝にもいまだくれぬ衣でにかゝれる涙なかる

十二 人しれずよびひにゆきてちかぎりもいまだとく衣でさよぞかはれる

此衣手ハ皆ぬれにしといふこと。古今集などにもまれに此様なり。それおほくハ。上の句まどしいふなり。またよいまだくしれるも。△の字しを待つる事は皆その事をふしぬる

十 さねそめていくとも行く衣で白妙乃衣こふべしやちひかやま衣で

此うた八月ど衣で二つ有て二様にいまだ秋さまをふくなり十の巻の十八のうたにかみちであれく山家のあそもいでじとおもへを末のきり。此うたへも同じのまきなれバ此衣をとりし様し

[illegible]

二 かくばかりこひつつ行く[illegible]しらぬ山のいはにまされてこなましかを

同　かくまめて立つ行く　ぞバ　おひしんきちゆゑに志気ゆへ足が勞

同　見にと〻に立つ行く　ぞバ　秋萩乃咲てちりぬるをにありましを

三　すくろり人を行く　ぞバ　酒盛に酔をしがも酒ふしみなん

四　おくまめて立つ行く　ぞバ　本ちふの妹背の山にありなし物を

同　かくばかり立つ行く　ぞバ　若木にも移らまし物おもひして

同　よそゆめて立つ行く　ぞバ　志がらみ池ふちにむちふ鴨よ行くほしを

同　見が思ひかくて行く　ぞバ　ありしも我がためとも妹がるにまかれなん

十　かくばかり立つ行く　ぞバ　めくり月に妹がふしんつちふありましを

同　わぎもこに立つ行く　ぞバ　からこも我思ひみだれて志ぬべきものを

十二　すそに人と行く　ぞバ　くちもふもなかりまし物を。かの歌だから

同　たくまめて立つ行く　ぞバ　たごの浦のありなまし玉藻かるく

同　いつまでにいのちもおそく〻八立つ行く　ぞバ　志ぬるまきれを

八　秋ちだのうへにおきまよふしるしをうらしきなまし立つ行く　ぞバ

十　あき萩乃枝もそれにおく清白の番かもまなまし立つ行く　ぞバ

同　秋の穂を志ぬにおしそべおく露ちかもまなりし立つ行く　ぞバ

十一　清るぎりわけちもちるへまゆきぬまて志せるも志なん立つ行く　ぞバ

同　ともみのえちはち行きちきのうかまもゆうん立つ行く　ぞバ

同　水沼のきよふする清乃ありそにも行し清し物を立つ行く　ぞバ

三　あらしねき酒をおりそ　ぞバ　一杯の斗ごまる酒をのむべくあらし

五　たくまめてあがこひせ　ぞバ　清筆生ちる名の笛ふもなかりまし物を

八 ふくしげき里りにもふ【ぞバ】すゞなきしふたゞひていなまし物を

十一 なかくにゑりこひ【ぞバ】ゐくの浦路のあまならまし玉藻かりつゝ

十 せれ東路あにあひていきら【ぞバ】咲て散ゆし花ならましを

右のぞゞ皆一つの意にて。そんなら(ならバ)。といふこゝろ。「ふつて」行ならぞバ。「ふつて」あらんならバといふ。かもこゝなむずらんと知べし。言毎りゝなバならぞも。いづれもこゝな志乃ここ成りてんならバ。一つにつゞけてぞきハ。一つの意もみな。いく所にあるを。又八の哥の「あはれ」とこぞせ。「ふつて」行ならぞぞと同じきにて。一つの詞とぞせぞとよめる。右の哥ぶは意んゆゑと。ぞ意ぞ此和のかぶつゞきに合くほどにをおかふべし。猶うたにしまゝもし此ぞでの辞をんれらの。ていふぞ意の説あれども。言でふ。ちぞ加へりて。一つにつゝねんぞ。さる説あるまなし。一つのこゝろこゝなるぞやら別のぞこま也

【ぞきらし】

【ぞける】【ぞけれ】【ぞきん】

「獨」ねりぞぞけれ 三ノ廿二 六ノ廿二 八ノ廿七 日五十七 十二ノ十八

「ふ」やまぞぞけれ 十七ノ廿三

「え」あきど行りぞぞけれ 十八ノ九

「ま」てどさぞぞける 四ノ三十

「い」まぞさかぞける 十ノ廿七

「い」袖ノえぞけれ 四ノ廿七

「せ」りてきをぞぞけれ 十ノ五十九

「か」くめ乃ぞぞきん 十七ノ四十七

「ゆ」きでこゞぞきん 六ノ十六

これハぞりけるをぞかるとくにひ。ぞりきんをぞきんといつる様也

【○○○からんのとのきん○○】

「ゑ」しきんらし 三ノ六六

「さ」ぶしきん 四ノ六九

「ゑ」のちぶげきん 七ノ廿一

「や」くぬちぶげきん 日六九

「き」なバをしきん 八ノ五十六

「船」のとやきん 九ノ六九

「糸」ハなぶきん 十ノ廿一

「ち」らだをしきん 日六六

「い」こらぶらきん 日六十二

「う」らがきしきん 十四ノ四

「き」かぬ日なきん 十七ノ十六

「ち」なバゆときん 日十六

「め」かる日わひきん 日六九

「あ」みちぶきんぞ 日四十二

此様古き集よりこなとにもまれなる也。さいむらんに関者ふなふよきんな。どいふもこゝろえ又右の介よ

八 こひし【を】ぞ秋えふせんしなやぶふらまし若葉を今咲りけれ

十一 今ぞしる月なかりし光そはひとまで思ん年月久しき まくに

十九 玉の緒ながらふとこゝろ明神をこそかしこまりて かしこき めやも

あまりの事をかへるのまゝ也。思しきをは思しかるぞ也。久しきまくは久し
かりまくに。かしこきめやもとはかしこかる光やもそ也。其かなりたきんとりやう同様也

あそ

あさとな

あせぬかも

美にみしあそ 四ノ五三 又ノ千 十ノ十三同廿一同廿五

為りうかべあそ 同十九 みる夜つぎあそ 六ノ六八

為にぞつぎあそ 七ノ五三 まさきくありあそ 九ノ三千

いもに流ずあそ 同五七同五十一 十ノ五五同四十 六ノ廿六

ややくゆきあそ 十一ノ五五 古る紀并代のこにとあせるともる。あそと同じこと

うちが花ちらびあるあそ。 又ノ十八

ゆるびのとあそ 同二十九 歓

衣をうんにあらひあそ 十ノ五一

紐解きをバうちてあそ 打棄 十ノ六八

やまびえしあそ 十一ノ十三

件のあそハ。集中に與許母(コソ)社欲得(コソ)欲(コソ)などかけるを。此中に欲得(コソ)欲(コソ)などかける所をバ。今の本こな訓を誤まれり。又與(ノ)字を書きたるも。訓を誤まる所ありて。又有社(アリコソ)を行こそ續(ツギ)

許増(ソ)をつぎてそと訓るなどとおなじことなり。その巻の末に阿利許曽(アリコソ)。十四巻の末に佘保(ホ)
此與(コソ)とかけるを誤まりて。いづれも此格によむべし。次の巻なる飲與(ノミコソ)を。同光あそ。
十二の巻の寿欲(ユキコソ)を。ゆきてそなどよまんをおかしこし。こもりハ板本の訓を誤いふしくにや
きれじぞも。そハ其ぐくおきて。今ハ訓を改さん後の人のしめよおそろかしかくし
伊勢物語の末に絹裾ふくとゐふつぎこせと有るは。此こその転まるを。同じ所り。故に
を絆のこと々んねるハ。左へをまちおもしらじ

ちりまあさとなゆ光 八ノ十七同廿同五九同五十八 十五ノ五七 思ひまるそに行ひあさとなゆ光 十一ノ七

ちぬゆそふと我ありあさとなゆ光 同五七 絶 云
あそく行ふを紛ふ辞あるを。あさとなといへる。
まく勿者と紛ふ言なり なる紛ま

ゆるあせぬかも 十ノ十五 又ノ十四 六ノ五七
ここハ上の加の條より出せる。ぬかぬかもと同じ格也。あるそ
よおりまり。こせぬかもとよめる。右の歌ども誤まる。又今本訓を誤まるも有

流ぎあせぬかも 十ノ九十九 つぎてそと行くと同じ

がね

がに

三 ますらをは名を未あり かつしいつる矢を後見ん人をかたりつぐ がね

四 佐保川(せうろう)のきしにつなぐさの小歴本ながれそまつるを張之事者立隠 【がてん】

十 梅花これをちらさじ青丹よしなしぬる人乃きつくろ 【がてん】

同 くれちぎる我ゐなやし城ゑん郭山清水に名まできみ渡る 【がてん】

同 何しろ乃山田つくる子むでむしるとしめらふえへとめるとしら 【がてん】

同 あきつねするふ恋つる夜されハきじ志ふ柿(奉)ざさばよろもきら 【がてん】

同 雪ほむるほきみハさかぞてうめゐ花よし比でろきもそもいら 【がてん】

十八 志ら玉城つみくやらバいや見事花しらちぎるゐいへとぬく 【がてん】

十九 ほそぎ次きけをいらぞあそぞろにこりてなつきをながとじなく 【がてん】

十二 里人をかくら流ぐ 【がてん】 よし恋やし恋ても志ちんさがゐなくめや

五 よろ川よふいひつぐ 【がてん】 とそく

十七 おくのきを石のくも出てふりしきる 【がてん】

八 秋田かるゝ衣いまださらねぞかりがね帰し寒もおきぬ 【がてん】

十四 たりしろに蛍をばなやきをかぬる事にあひ事まじをおひバおもる 【がてん】

四 ひが室戸の夕徒歩みえしる落乃きぬ 【がてん】 りくなおかりわかるかと

十 うれしきや志とほそぎさき今こそハ数のかる 【がてん】 さきなれらよまめ

同 秋づきばあ茅みなの行えぬ 【がてん】 おもへどきらじょうじ穴をさされバ

十二 さ麻(ぬ) 【がてん】 をたまくと緑めどおきつもみなびきしたがふます川ゝ旅なを

十四 むろがやの清るのつゝみのなりぬ 【がてん】 ころハいへ生いまぞ旅なくに

八 おふるくゐちぎる我うしぬくふ月を道ゝいえぬ 【がてん】 花咲ゐれ里ろく

十三 いまをとめうがうながせるむまもてる 【がてん】 ろく白ぬの袂ふる見しつらく

上件がもハ中昔の云ふきざしがも 堵がも ひこがも 博士がも などいへるがもと同じくて。かもてその料にまうきてまし川きこし。又がふきがもふといふてこそ。孫にをつゞきていへるありがもともろし同じきこし。さて集中假字書の例にさる加にハ偏寄の我字をうけまへバかならずしもふごるべき辭なるを

さね

かやをかりさね 刈 一ノ十二

あが名のりさね 五ノ七 九ノ十五

秋萩の花をふりさね 葺 上、 又十五

たしざゆりさね 十ニノ 四十、

ゐ孫てやりさね 十四ノ 十

むともむさばさね 同十五

せなと注まさね 同 十八

裡をふりさね 十五ノ 三十

玉拾ぬりさね 十七ノ 十九

ゆふをらりさね 十九ノ 十二

きうえいまさね 同 十五

椅川まくさね 同 十二

おやりまをさね 二十ノ 三十八

此さねハ。まづ萱(カヤ)をかもといふすを。かり孫すいふ。此孫ハ後のうるとむとにして。本の光の孫の約り出せれな。こてにハ出さず。さて又うれ刈(カル)をを古なるハ刈らせなどいふ。あがりせよりのかり孫の例のごとくに。孫を添ていふときふ。かりさねとある形う。條もこもなぎへてうきまふべし。然あバさハせのちうらうら言。孫ハりりねのりね

などいふ孫と同じくて。さねとつゞきなる一つの辭にハうらうぎれども。かくいふ例ハ古今集よりこなたにハ見きあふざて[?]例にしもつ

そ孫

塩干なうりそね 十 四十三

野べの秋をぎなちりそね 同 四十七

紫なかりそね 七ノ 十六

あなふりそね 九ノ 九

あふくそね 雪そ 十五ノ 六十一

雲な婦くそね 同 十二

あふそそねをし 惜 同 四十七

居なさしそね 二十ノ 十九

こをハつねにハそとのといふ弥を。下に孫を添たること。集中う證文多し

あなふり行年 三ノ十三 十八ノ十七

あまりの行年を今の本にハこなこそと訓きた。他にこそを行年とまる例なく。又上になといひて。こそと結べる例も他にあれば。此行年ハ瀬てこそにハうらんで[?]。若に[?]挙るもその挍と合く同じければこまうとおもそねと訓べきこし。行ハかりハ所字などの誤りうるとやうらん。文字汰とハいまだいふなる思ひえざるん

風なふき行年 七ノ 十一

大なふえ行年 十三ノ 十六

との

四 わがもてる三あひによれる糸もちてつけてまし[もの]今ぞ悔しき

五 あまとぶやとりにもがもやみやこまでおくりまをしてとびかへる[もの]

このものハ。ものをといふこゝろ。古事記履中段に。たつごもゝもちてこましものと。又雄略段に。[illegible]とこよにもがも[illegible]ものゝ。これらも同じ

十六 はちす葉はかくこそある[もの]おきまろが家なるものハうも（芋）の葉にあらし

同 馬にこそふもだしかく[もの]牛にこそ鼻縄はくれ

あまりのものゝ。ものをといふこゝろ

[して]

三 よし野なる夏実の河の川淀に鴨ぞなくなる山陰に[して]

同 みどりごのはひたもとほりあさよひにねのみぞわがなく君なしに[して]

四 ことでしハたがことなるか小山田の苗代水の中よどに[して]

十一 いせの海人乃あさなゆふなにかづくちふあはびの貝のかたもひに[して]

十四 ひろはしを馬こしかねて心のみ妹がりやりてわはこゝに[して]

こゝにしてハ。にてと いふこゝろなり

三 忘れしこひいこともをべまたいろしらずの様のとしまるよひに[して]

十一 しろたへ乃そでがへるとでふ春ハおきぬ妹子をいちしろきたびに[して]

三 みちのくの真野のかやはらとほけどもおも影に[して]見ゆといふものを

八 雨はれてきよくてりたる此月夜又さらに[して]雲なたなびき

これハさらにといへるにてあるを。してハ添へたる辞也

[しく]

四 夜のほどろ我が出てくれバわぎもこがおもへり[しく]しおもかげに見ゆ

七　今しくも見めやと思ひしみよしのの大川淀をけふ見つるかも

同　住のえの岸の姫松なべにかるべく玉拾ひしくつはなかへで

同　わがせこをいづちゆかめとさき竹のそがひに寐しく今し悔しも

八　秋の野の尾花がうれをおしなべてこしくもしるくあへる君かも

十　あひしくのきをながれ垣を今ぞふみとりしむべしや来べき夜ぶかし

二十　よし川宮はふかきにふりしをあひしくのおもかげ跡はえつつしのばん

十二の巻九のうらに唯毛とあるを大しくもと訓み此例によらばここも同じ　あしく心應神紀に孫しく思ぞとあるも同じ　文廃帝紀の宣命に今之紀乃間方とあるこの之紀もこの知くと合ひてききえたり

ほり

旧　月夜よみ門に出たち夕占とひ足卜をぞせしゆかまくをほり

同　さととほくあれどもしまくりのうたにたちまつらん君が見まくほり

此外おやのめをほり　妹のめをほり　味が見まくほり　などあまたあり

く

三　わしたの大宮人乃まぎてこし川にわたるの足きん年のしらまく

同　いもがあたり見るたちかくるもがもと思よまたれ見とかしらふなばいのしなく

七　泊瀬川ながるるみをの瀬をはやみゐでこす浪の音のさやけく

八　こもる山の麦の葉しぬぎふる雪乃きぬとらいそもとこの志ぎく

十　なまよみがはあさやこえ波立君がまもいへやまずまつはばよのふけぬらく

九　あしひきの山のもみぢ葉常ちひておちん山路を君がこえまく

これら上のしくしくしくちちにありき。此格集中にあまたあり

二 みよし野の山松がえハちしたゞも君が待ちてかよせ[く]

三 見まくせぞ昨日のうしたりぬる火のほすぞ出ぬる妹まらかく。[く]

十 何ぞ思ひずあるまじこゆ思ふのをおもひて月をおもひらさ[く]

十一 あしびきの山田りるをちがおく鹿火の下こがれのとまごひまく[く]

四 学中しくらしたりの下有まらく。[く]＝あひみまくへせて死ぬべき思へぞ

日 春路あそいやしたふるふる色のないまでさる[く]＝いとまうこかを

二 こまくハ上の○のといふべしそぐと読びきり

らく

あふらく[ ] 見らく[ ] せくらく[ ] あやらく[ ] さぬらく[ ] 浅ぐらく[ ]

何らくも恋ひし 三ノ十六 あかしつらくも 四ノ十二 来 ふらく 日 又十四 ちらく 五ノ十又

ふせらく[ ] 日 六ノ六十八 荒 あららく[ ] 六ノ四十又 居 かゞらく[ ] 十一ノ十九 よのふらく[ ] 日 四十二 あちふらく[ ] 八ノ四十三

思ハしむらく[ ] 十ノ五十 とくらく[ ] 十一ノ十八 おもあらく[ ] 十二ノ廿九 年路色ぬらく[ ] 十又ノ三十

かゞらつらく[ ] 十八ノ廿七 いづまでも尽を延てらくといへることあらるを同ド

あへらく[ ] 六ノ廿 十ノ廿 まさらく[ ] 十ノ四十八 恋まらく[ ] 日 又十四 たてらく[ ] 居 きらく[ ] 十三ノ十四

あまる板本ニ訓を誤まり。あへらくをあふらく。まさらくをますらく。恋まらくを恋ふらくと訓て皆ひがごと也。まへてらくハ尽を延るるにてらくハあへらくハあへるといふ辞にて。あへるといふ同じきを。あらくとよむとて。何ならといふすに当まり。然そりあらくと訓てハよつるといふすまさりたるをいふなれバ。よつるとハいひがたし。たつるハ他をたつるにも。これ丈にてハ給ひ。姉もこまるにあぐしへてうれまへあるべし

まく

きまし きまく

ふらまくハ後 二ノ十二 見まくもまらじ 四ノ六十九 ふらまく恋しぶ 七ノ十四 こひまく思へぞ 日 十七

見まくはり 公廿 娘らまくを見ん 日 又十五 ちらまくとえん 十ノ四十二 見まくし ちよし 日 四十五

しなまくのこと葉 十ノ 四十二 こひまくとおもふ 同 四十四 ちらまくを 十三ノ 三十 みまくちかきかな 十六ノ 六十三
しがらみまく 十九ノ 六十一 おほえまくハ 二十ノ 十三 消ぎまくは 同 五十三
わらづまもまくハむをのべたるにてぞあるを
まく

三 長歌 角は法をあいまつのそとおなさしは ゆききかん人の思ひつゝ思ひ（きまし）
さてしらく代なりしたえずとおもひて かくよむきかん心をバいらし
此きまし。バきかんとらふことか。思ひつゝ思ひきかんやうハあしくとぞ。その思ひしる方をいひつゝ。ら科て。かくのやうにして是代の疑じと思ひて思ひきかんといへる也。まじとんとはとこと

十八 長歌 ちしまよし昔のつるぎにと行きよひふたへくもまだもうちなきさ
かくらり（きまく）さらし
このまくもきまくハきかんを延ぶるまで。たのきまじと同じところぞへかりくハ久字を
あまバりくハ之の誤るぞ。これらきまじにてもいうんらされどむを延てまくと
いふをつくるまバきまくまでとよらし たし

文章の部

○てにをはハひとり哥のうへのみのことにもあらずて。よのつね何事にも。さだまれることのへ
なくしもなく抄ものや物がたり。後世人のかける物を見るに。違へることのみおほく
おもかるそらし。此その人の書の心にそむけるもしらずしてとどまるよ
世のみなさどもあやまれるをしらずしていふ人の心にもあらざりにしてひとつ出
もとある物までもたちまるやうにハいはれのつづらぬはあしくすらでゆるし
あるはまさてその心ばへはいと生ぐしとつねのことばにてもあるをとしる所にてひとつのてにを
ぞ乃みきみじかききちがへるものあまた上下のへたいさうるとかく
なることなし。いづくにまれ後の切りところがあるにと上乃てにをはをえた乃
かく定まりて。上と下と上へとつるとぬとぬるとのたぐ

ひなど。あしく〳〵あの法どもまた上と同じなど。結びのゐを法くべきもの

なりたとひ文章などことごとくいふぞうりは掛るとたがへで何となく

しらずなりゆふ一くだりかゝる此の格なりとも。此てにをはゞかりは。みだりなる

まべきにあらず。此らをもたがへるやうしるしゝハその人の掛かく書乃。

大かたこのつゞきあひもかゝりて。ゐおそりせし序ハその掛かし託らざ

あらむや。かくていま此るをいふにまづ始る託文とハ。延喜式の八の巻に

素絶載せられたるもろもろの祝詞。また續日本紀などの御代々々の

宣命の詞などのまつりあまたることするにあらがひ時代をしてあふかひて。詞

のふることをとりぐしにあらがひれて。ふるきそのよくのひとそりそくしと時る

としまりとバ。今別にハ出まだとど。古今の序ふありての歌の集の序詞を

しかきなど。又掛詞日記など紙一つ二つ引出して。ちなむみをさとれぬぞ。

古今集序

たけきものゝふのこゝろをもなぐさむる[は]うた[なり]

ありはらのなりひら[は]こゝろあまりてことばたら[ず]

小野小町[は]いにしへの衣通姫の流[なり]

大友黒主[は]そのさまいや[し]

これ[は]君も人も身をあはせたりといふなるべ[し]

此外[も]かくのおほく聞ゆべ[し]

天地のひらけはじまりける時よりいできに[けり]

また山部赤人といふ人あり[けり]

早川ふむとりふりあらまし[き]
なつかしき人よむ人おほかり[ぞ]
あるはかゝる女を見て後よんはらどれがおとし[し]
右ハぞこそ後のかゝりにて皆むすびは右の行の辞也
よろづの言の葉と[ぞ]なれり[ける]
かくて[ぞ]花をめでうぐひすにあり[ける]
かゝればこれもかく[ぞ]ある[べき]
はづきこれはいとあはれなるよろこびのこと[ぞ]ゆるべ[き]
[いづき]かうたをよまざり[ける]
右ハぞのや何のかゝりを受てこそ紐鏡の中の行りなるとぞいふ

上件の語どもをもて文章にてにをはを定むること歌と全く同じきこと知らるべく又こゝろ得しらぬほどをもとむべきなりけり。

[なん] 此なんをなき文ハこゝに奈毛といつり
おほよそ文章にはなんとかゝりてにをはをおさむ。そといふべきところをなしてかゝりのどまでにいふ辞也。さるなかに結びも皆ぞと同じ格なりこれ八言にもまさしくつらぬ辞なるなかに今はなほ例をつぐ。

それもじをかゝへてかゝるべし[なん]あり[ぬ]
かきけむ本の人まろ[なん]
言はむどもなり[ける]
やらしのこ[なん]おもし[ける]
えらる所えぬところをかひに[なん]あ[るが]
よろの時丸かりに[なん]あり[ぬる]
ばかりの時にあつるを[なん]よろこび[ぬる]
これらにてしるべし皆ぞと同じむすびなり

土佐日記に心あるものハそれぞれなんあなる。こゝにぞとなんとを通するおほよそ例なきことなり。猶よるべし。一本にハそれぞれをきなんありけるといふとぞきこえねどもし

又かざすの日記より。わすれぬるなんぞあることもまたなくはのいやまり
なるさし

この発端人の文よりて加く波乏ふ此なんのおき所をも偲り。又その結びの
辞もみなりもそこのきぬがおもきハいらふぞや。
おきそうのるがふとハ。なとへぞ
わるとらふゑ横なる人まろハ言の初句つぶなん。なもるといへぞとへての流のことらりるを今の人をその
わくべきあるを言らんで。らふりわかく見ら本のてく人まろなん言の初ドてあり
て。人まろをえり出ていふ辞し。結ぶる句ドつぶなんとらふはハ。人まろ詠すといふそし。言の初ドてある
よしをえり出ていふなる。気をとまでまべてなんのおきさてるの元の詠みることを準べきるべし
又流のえちなふおくるすもいう。此下数行の言詠尾流ふ此言ハまるく数上ゆ
言されきりきる詠み見しいきのるまて流るふまふるく なん などのめし。拙流 など
ふ此格なふおりし。これもぞといふふ同じきし とあんハとそそと
いそんがあし
同条言の詠をし書
ふるらしに春くらぬる月よめ 言
岩のあふふりと加くまづるをよ見 言

言まれし作りたりし時よみてなれ 言　梅花をくつとて人りおく
つと 心分　此あなび。上よぞのや何などの辞なれど。よあつと なまはをおくり
ぬるといふべき格ある流。つとしいなりて結言とりふハいふといふふまべて言
のえし古ハあら言へかつていふ梅ある体ふ当の流のえちあとハ異ふして語ハ
切きてもまハ切まびしてやがて言へつづくらし。言しの時ふよめる言といえん
があらし。締るを流よ詠句のごとく。つとといひ切てハ流もそことを法く切きて。
言へうくらざるし。これハ条詠言のえし古のことふもいわれ。まべて拙流みなど
まてても何までも言へうく添所の句乃そちえハ皆同じるすし。古人のあまねるとう
よみてやらし。今り
つらハし などいふしも同じ格なし。又屋尻の結などの言を裁する詞古にいさくつの言のちるを
見ゆる岩のむ松ふかくるる 又何ちをさきそこ 猶りほせるなどあるも同じ格なり。細るふまさ。
山里ふ新ふ鳴るを。都ふり見の木あわそと。菅ふをこ見るなと。女の方に男いそりてたてるなど
をもあるらぬをわかし写し流まるおやとも見ゆ。さみハあしくてみしよりかく言るし。雑の言をまる

さて何ゝなどハなくもあるべきをすべてのあはれをしらせ、又離別 紀 かへる夜ゝ日ハきかじ
るハ此格をよろしかしまじよくわきまふべし。
かしの衣のたもとにしぼるハ行く人をしよみてつらん なる とまで上にぞのや
何などいふ辞なくて入るゝとおもへるこれをさしおきてはちりぬれば、入るをとく
いひくハかへりてよろしからむをたのみてまどはしげなるよみて流れいふるさきとやう
に下へともとふかき事をたのみて。かへるといふまでハよろしかるべきことのハてふをも
そのおのづからなるべきをまたさしとりえてハおのづからめでたかりけれ。

土佐日記

をとこもすなる日記といふ物　門出を　ふなぢなれどむまのはなむけす　をりを
うまのはなむけす　和の時だかりに船出を　ゆくしてかへりとを
あのしるひのをを。今の人ならばかくなるといふべき所なるを。
上よぞのや何の辞なくてハあるとハいひそぬしけり

をしかきつく　人くたしきをかなしむく　海ぞくおひくといふことなくて
きこゆ　よ路海などく　み舟くる舟いづ
このかなひも上の事と同じ格なり。今の人ハ皆をと。なきつて　を　かなつる事を　かなひくをを
いひてみなむかしなり。よく
かしてかくへきてこそ

今かく此日記を読み行くに。旅路の日記などかかん人乃心にふ
とくなる。又この格をおもふ人のよく得ることそれなくてもあるべき
後世兼好法師がつれづれ草に。人づてひきさそとる。
てハうひあるべしとかかりけん。つれづれひせるなり。かくさるうちにも
この格を読まり。人づてひせるかとて。うひあるそと。おれむとも。
べきをこそなる。ものさいつるハさとして。やる辞の格をりたゞりまべて此法きく
よれのよく。今の世の人乃かてゆくまじ。なれかほら
かしおくこと。すへてハてふをも此格ハゆくまくなし。

伊勢物語

第二段 西の京に女あり[けり] その女世人に[は]まさり[けり] その人かたち
よりはこゝろ[なん]まさりたり[ける]

此細注の文までは。けりけるといふ辞をはなれたるに。まさりけりの格一つもあらざるとなしゝを注意て考ぬべし

第十段 むかし男むさしの国までまどひありき[けり] さてその国にある女を
よばひ[けり] ちゝはこと人にあはせんといひけるを。はゝ[なん]あてなる人
に心つけたり[ける] 父はなほびとにて。はゝ[なん]藤原なり[ける] さて[なん]あてなる人
にと思ひ[ける] 此むこがねによみておこせたり[ける] すむとこ
ろ[なん]入間の郡みよしのゝ里なり[ける] みよしのゝ

此段のけりとけるとよりよくみて格のまへあるがによりておこせたるとい
へるは上に[なん]あるゆゑなり。けりといふべきをけるといへるは上のなんといへるなり。
意をよく分るの格に。その次にむすべるなん入間の郡の文を。へだてられたる此段はなほ
みよしのゝよみてある歌を志らさん料の注にて。別のすぢなれば。よみておこせたりけると

いふより前へかゝる格にて此例つねなり。伊勢集に。ある大納言の家よりむかへ坂なに
まぎらはしくいふことのあるによりてかくやまとのみならずある
きけるに吉野川に…などおもしろかりける。吉野川 せきいれてかへさましとかき
つけてはといふより前へかゝるまゝて。其次に吉野川の…どもの詞に…をよせるなど
をはしらるゝ。さて其詞も同じく前へかけてはなるゝといへる。かゝるところと
同じ例じ。心ねおくべし

第八十二段 みこのたまひ[ける] 詞 かく雪をかきてえし

第九十六段 女いひおこせ[たる] 詞 今は何の心もなし

此たる。あるも。前へかゝる詞と同じ格にて。次の詞へかけていへるなり。次の詞をあやまち
みこのたまへる詞。女のいひおこせたる詞なれば。なほ同じやうに。すべて其時人のいへ
る詞へかゝる詞のとぢめは。
こゝに此格もあるべし

第[illegible]一段 いやしき男もて[る]。志を次のつかさにて
此たるをかゝる女といふまでにて。女といふことをふくむ。多く此格はつねにあり。
心得おくべし。一本には[けり]とあり。かくは…なり。

第百一段 ちかしきものかへり[なん]あるじのすゝめてまうらせればこ

らくよませ なる めとよみなおすはよし

此なるかなるも。そのかなると同じ格ぞ。なるかなる男といふことし。さてまた
よませなるハ。なるをとりなるにとり。下へ辞を添て心得る格し。なるゲとく。かしを添て
見れバ。俗にハ心得やすし。此格もつねにあることし。紫式部日記に。そやうよりよるハ
女きち称りし人ヰ年でゐへとゆきうひよる。ほのかまて十月十日ばかりの月にきまか
むてうりに[illegible]バといひる。此ゆきうひよるも同じ格まて。[illegible]るをとりにとりいふさ
あり。よるかとかを添て見れバ。[illegible]やもし。かくのめき[illegible]を今の人をあやしといふし。就さ
がもがらといひてハつるあし。ゲえをさ[illegible]いちぎりしてよろし。次の詞へいひかゝる格
ありかあらん此格りいふべき詞のいきかひ。常にあることしよく心得おくべし

才六十 三段 一 三ッ部あり[illegible]子 なん よきたれ男 ぞ いでこ ん といふを まる に よし。

こまハ二重のてふをその格りて。上のなんハ。まく下までかく写して[illegible]のまるふ
て結べる。を中間にぞいでらんといふ短き詞のさしまうする故。そと見ていはよぜ
ふし此格まかと省て。二の字に出なり。文ヰハ辞りたるし。さて又こてハ[illegible]
まて。上のなんを結びきるを。かく見て又下へつぎまるし。かくのあらく。切るるさう
きやかで又下へ法べるるなるも。
文りハあかく行る格あり

才百廿 八段 一 いら あり まるう[illegible]むなるまり[illegible] か よ[illegible]

此かをぞ今の人をおほくやといふし。まべて何などの下ハ。皆かといふすをぞやといふハ
むかうある。ロの[illegible]何の詞りあくいふ[illegible]し。今の人。文ヰハ甚ふよく誤るす
あるが[illegible]に今文 おそ
ろりしかくなり

才六十 三段 一 ふるち[illegible]子 を あさきをくいうへてやと ぬ 上ヰそといへるあ[illegible]ぬと結べり。
[illegible]ると八結ぞば

同段 一 あと人 を いと[illegible]さけな し 上ヰそといへるあふなしと結べり。なきと八むをそぞ

才八十 七段 一 ちの[illegible]かく[illegible]を せうかうじく[illegible]大きさ出てちぎまお つ おつると結ぶ

才六十 三段 一 まてあらぬ[illegible]がうちき を 上ヰそのや何の辞あさきを まるとハ結ぞば

同段 一 女あがきて ぬ 。とて 上ヰそのや何の辞あきまよぬるとぞとハいふもば。今の人ハくふ
あをうあらば ぬるらてといふ。そハむがてあり

才九十 六段 一 こまし[illegible]やまらてい ぬ いぬるといえんハ
むがちくし

才六十 六段 一 [illegible]まにぞ あ なる とハきけど この上ハあらといふ格なれ。ことハ上ヰぞくい
あなふあるといへる。此すあの巻との詞ヰ[illegible]

才四十 段 一 [illegible]ひて こそ いひ しら 才四十 八段 一 かく こそ [illegible]ひ しら といひなるそ

件の格どもハ。人のつねに謂ふことなるなれバ。めづらしげなけれど。くはしく文の詞をそへも。
此の格どもハもろ同じたぐひにて此例にても知るべし。

源氏物語

桐壺　「いづれ」の御時に「か」女御更衣あまた云々

同巻　「いか」なり「か」とおぼしきまで有る

同巻　「いかに」思ふべきことに「か」云々。

此ならびまでて。何事の下にかをやといふハ。むかしかなる上にもあいへりどもこ。
是ハ今の人のよみ誤りて。やとのみいひて。かくいふべき様なるを知らざるハ
うへもぐしるなし
まじきなせるし

同巻　父の大納言ハなくなりて母北の方「なん」古への人のよしあるにて
おやうち具しさしあたりて世のおぼえ花やかなる御かたがたにもおとら
ず何ごとの儀式をももてなし給「けれど」云々

此なんハ。結び「なり」といふまでへかゝれり。なんの結びなれバ。なるといふべきを拘じ
て「なり」といひて。やがて下へ続きたる格にて。文ハつゞく。語のさかしく続
くさまの後世人の文などハ。やゝもすれバ上のかゝりにてふさはしきをよそれ
ても結びたる「いづれ」の類も。さしうらあるべし。「なり」ゆくてもおそきへ文まとかなり
ぞてふさをのらくのへのけるあしをまうざる
ゆゑの誤りなり。「なり」又よく心得おくべきなるにも

同巻　家の語られしあと拠のこと「なん」ただしいそぐ「出まで」云々
「なり」もなんの結びハ此なるを構じてめまぜよし。やがて下へつゞきたる格。
なり。此様なるハいとをしく。文をはつれふおさきとかな

○此源氏に此例などハ。まへよく人のいつる詞乃。いとあまやかなるところ。文めでたく
心のうつりなくなどまでいとしくらしくかきけるうかる格なれバ。くさぐ
もしちうりいうてふきを。文ぞなんてなどかゝりて。何まくのこきをへぶ
て下にいと重き所りて結べるなど。或るその中多に。二重あるも三重なる。
くさなきてふをはなど多あまれバ。そのさらく結ぶべきの語のことをよ。

くもられまへぞして。あやぶがらふ見えば。まぎらはしきところおほかりし。さる
あやひも。みまこなふふんをつぎて。らくかきまへるらきハ。その人のまなびしく
いとよくまうまで。よべくでふをはのみぞありしとハ。なさきしくねきこし。
○いづれも此書にも。りとろとハ。上よりつゞけてある事を。字の形のよく似さ
ふあそし。見まがへるくたがひに写し。なや まれるがなかき跋。その人そえ
ぞば。くちをがひなきなんものぞ。

上件古今集土左日記いせ物語源氏物語などといへるが中に。この四
くさの物語をしも引出しつることハ。なべての時何も見でらく。又語り
人のめぢかくよまるれつる物なれバぞかし。さて又此書どもなく
ふかて八華つまかども。そのまゝく打すてをとて。おのくちとある物

このはあらバいづれの物を解る者。その人をむらしくそかゝれるなく
なきまことぞ。ことかきをよりしてそなむらつ不まなれべし。猶文章の
てにをを好るすと。今きこし。あまらふいひなはしきふしハあるなれ
どいひゆてゆ事バ。みな家好そのへとりそら問しくと解まバ。うるさ
くて。おなくはわかりしつるを物の詳いでともなうバ。まらくと
いむてんうし。

あらずとも。久しく思那留可無き(ト)
皇の来るにぞ傳へ給はまる。畏(カシコ)き後也天(アマ)
照(テラス)大御神乃御まもりにて絶えず御世
天地とゝもに限りなく天(アメ)の石屋戸(イハヤド)
出(イデ)坐して常(トコ)夜(ヨ)由く過ぎて
ぞ爾ふ末り始めて後に照(テリ)明(アカ)る是
天下萬も。何れ志る凸(ボコ)中なる毛

多久中臣(ナカトミ)乃。天津告刀(リト)乃婦登
能理詞(コト)乎。宇麗(ウルハ)之久加久之尓留利
止云比三奈加良。志可毛事舞婆女云乃
多多能心之乃信白。於保之加耶奴於伊
尓之君於波那都弁佐那之多麻比。
古波表手海伊(イヅ)都連理乃神乃御(ミコヽロ)
那理多万乃。中津代乃末(スエ)乃方。天(アメ)乃

下多須尓波施連奈。与之津乃
承尓之女。秋草(アキクサ)乃之於之波之
尓満年。此乃乃信波多徒佐
母乃之乃信理里之波。其乃乃
之奴(ヌキ)女乃多乃年流人乃久
之。乃多乃乃之纏(へ)尓神尓。
世乃由氣。乃之女尓はる又。天乃

不尓鞆（トモ）乃詞も聞（キコ）之変。由（ユ）は変
乃佐毛義も那久鍛可は天て。
年乃代末傳尓。勢久信加濃奴字
飛二羽須良尓飛志豆理て。
咲乎曽乃尓原年実以之乃牧以宗
由久吉乃大寿世尓那留女。麻呂寄
与如常可ちに多礼渓女。高乃洩之

毛。又伊尓之常尓古河小咲波羅
佐我加多末計奴留加も。吾（ワガ）鈴（スヾ）乃
屋（ヤ）乃示乃（ノ）大人伊。河飛多乃乃末
満孫久以留斯義末て。生（下）留（ヲ）
葦（シカ）乃和（ニゴ）毛（ケ）乃真（マ）以筆（フデ）也。見よめ（ヲトメ）乃
多し理於和多久虎（トラ）天て天。加多
詞留帝三（ミツ）條（ヲ）乃古乃玉乃支多て。

久留之久乎良須加之比努可散

天。卅七末佐子那女毛乃加傳

給家年留加久此度久与知留

於学事。未盛女知乃伝賜那郡務

波女。今与里後は。伊加之於知年

能静末利知留女子。与乃人於

志知留波女於玉乃伊源津留光

毛。国学に以於末与以那久。我傍

近於孫傍禮女作難子之以毛

知留綾糸年許志伎此毛那留

子毛。加久云度。志乃多須之名

於学流。華満国人田中道万侶

瓊綸餘纏（タマノヲノコリノイト）

鈴屋文集

同　歌集

嗣出

和語陰隲　新鑑草　全部五冊

此書は古今漢土にありし珍らしき事ども実録にて主君に忠を
竭し父母に孝を尽し夫を敬ひ兄弟を睦じく朋友に信ありてつゝしみ篤実
貞操をもって天道の恵を蒙りし成らぬにあらして不忠不孝不悌
不義貪欲邪淫姦悪を恣にして終に天災に罹りし因縁
果報の著明なるを粗多載をも理人よく知らしむいかなる暇なき
人の所をさとして其極をふるゝ者も終に悟らせとすまし男女子までも
讀易く和解しなれバ見るに興ありて面白くおのつから人道乃要
界をかり天の冥慮に叶ひて許らる幸慶を得べるの宝冊なり

販元書林　大阪心齋橋通南久宝寺町　堺屋新兵衛

諸國いづこの本屋にも出しおき候間御求めて御覧可被下候